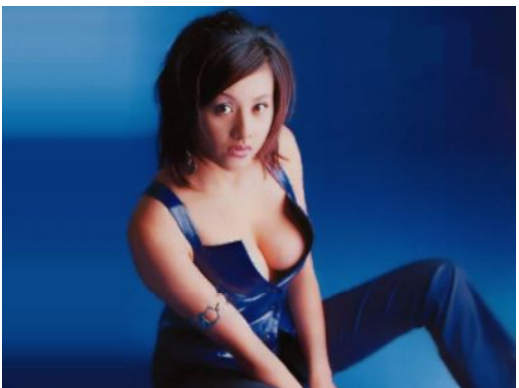


## 間違われた女



世の中には自分とそっくりな人間が一人はいるという。

そして、似ている人間がいわゆる有名人だと、とんだ災難だ。

私の場合、藤原紀香に似ている。

笑っちゃいけない。道端で何度指さされたり、サインをねだられたりしたことか。一度、ボーイフレンドとホテルに入ろうとしたら、パシヤツとシヤツター音がした。明らかに私と藤原紀香を間違えてフォークスしたのだ。幸い、その時彼女は（なんて馴れ馴れしく言ってはならないのだろうけれど、ここまで間違われるとなんだか他人でないような気がする）生放送に出演していたらしく、写真は掲載されなかった。

顔つきだけじゃない。身長も同じ。脚だって遜色ないくらい長い。胸は……たぶん私のほうが大きい。年齢は私のほうが三つ下（のはず。芸能人は年齢詐称が多いっていうから）。

ひょっとしたら彼女だって私の知らないところで迷惑してるんじゃないかな、と思ったのは、あるスキヤンダル雑誌をなにげに立ち読みしていたら、欄外の一行情報コーナーで「藤原紀香、深夜の路上で痴漢に股間蹴り」と書かれていた。

たぶん、私と間違えられたのだ。

一カ月ほど前に、仕事で夜遅くなった。帰りの道で、いきなり痴漢に抱きつかれた。夢中で股

間を蹴って逃れた。目撃者がいたかどうかは覚えてないけれど、もし、私を藤原紀香と間違えてたとしたら、なんだか悪いことをしたような気がしてくる。

何より嫌なのは、私に接近してくる男はほとんど藤原紀香のファンだってことだ。はっきり言って面白くない。ある男なんか、セックスした後で「あゝあ、紀香を抱けたみたいで満足した」なんて抜かしたから、思い切りタマをつねってやって、別れた。

とにかく、私は私なんだ。フジワラノリカではない！

ある日、一人で外出していて街中で声をかけられた。私は帽子をかぶりサングラスをかけていた。藤原紀香と間違われないようにするためだが、芸能人でも有名人でもない私が、なんで変装して外出しなきゃならないんだ！ むかつくけど、有名人の悩みという奴も理解できなくはない。

「藤原紀香さんですよね」

背後から声。うんざり。振り向かず、歩く速度を上げる。

「ほく、あなたのファンなんです。お願いがあるんです」

無視、無視。

「あなた、痴漢の股間を蹴ったことあるそうですね」

あーあ、読んでやがった。ま、たしかに私にはあるけどさ、彼女はどうか知らないよ。

「玉蹴り系のページで読みました。とても興奮しました」

なんだそりゃ。

「お願いです。僕のタマを蹴ってください」

思わず足が止まった。振り返ってみると、眼鏡をかけた小柄で気弱そうなサラリーマン。

「本気なんです。あなたが痴漢のタマを蹴っている場面を想像すると、もう我慢できなくて……」

最近じゃ仕事も手につきません。お願いです。一度でいいんです。蹴ってください」

むらむらと腹が立ってきた。そこまで言うなら蹴ってやろうじゃないか。

無言で膝蹴り。思い切り叩きつけてやった。

「ぎゃー！」

男は叫んだ。股間を両手で抑えて地面にしゃかみこんだ。周囲の歩行者がいつせいに振り向く。しまった。

私は狼狽した。しかも、その変態、しばらく俯いて痛みを堪えていたが、急に顔をあげると、

「何するんだ！ 痛いじゃないか！ 潰れたらどうしてくれるんだ」

とわめきだした。

私は急いでその場を離れた。かなり歩いてふと振り向いたら、なんとそいつ、股間を片手で押さえ、足をひきずりながら追っ掛けてくる。

私はパニックに陥った。走り出した。もう一度振り向くと、まだ追ってくる。青い顔をして走ってくる。馬鹿、来るな。

夢中で走った。人けのない公園に走り込んだ。振り向くと男の姿はない。息が切れた。せいぜいいいながら地面にしゃがみこんだ。

やっと呼吸を整えて顔をあげ、思わず叫んでしまった。

さっきの眼鏡の変態がいた。私から三メートルほど離れて、地面に座り込んでいる。顔色が悪い。走ったせいでよい股間が痛くなったのだろうか。両手で股間を押さえ、俯いて涙を流している。

「な、なんで追いかけてくるんだよー」

私は怒鳴った。

「あんたが蹴ってほしいっていうから蹴ってやったんじゃないか」

「だ、だって……まさかあんなに痛いなんて思わなかったんだ……」

男は声を絞り出すように言った。

「知ったこっちゃないよ。間違わないでほしいけどね、私は藤原紀香じゃないの。似てるけど別人なの。もし、ほんものだったらどーすんのよ。有名人だからボディガード付きかもしれないじゃない。あんなこと言ったら、あんた即刻逮捕されてたよ。何考えてるの、この馬鹿」

「別人？」

男は涙でぐしょぐしょになった顔をあげた。

「別人なの……？」

「そうだよ。いつも間違われて迷惑してんだからね。いい加減にしてほしいよ」

「そうだったのか……」

彼は泣き出した。

「別人だなんて……畜生、あんまりだ」

「自業自得だよ」

「だって……これで使い物にならなくなったら……」

なんて勝手な言い分だ。と、男はいきなりズボンのファスナーを開けた。な、なにする気だと、彼は自分の股間を覗き、また泣き声をあげた。



「わあ、腫れちゃってる。だめだ、もう」

啜り泣いた。

「一度もやったことなのに……使えなくなっちゃうなんて」

童貞かよ。ま、そうだろー

な。女にタマを蹴られたいなんて変な奴が、もてるはずがない。

「畜生、こうなるんだったら、本物の藤原紀香に潰されたかった」

再びむらむらと腹が立ってきた。私に近づいてくる男たち、私と寝た男たちだって、本音じゃあ本物を抱きたいのだ。私はいわば代用品だったのだ。見知らぬ藤原紀香には気の毒だが、私は猛烈に彼女に嫉妬した。

ふと、残酷な企てが私の脳裏に浮かんだ。

「もし、私が本物だったら、どうする？」

「え」

男が顔をあげた。

「一応世間体があるから、別人だっていったけど、本物かもしれないよ」

男はまじまじと私を見た。私は立ち上がった。

「立ちな」

男は痛みに顔をしかめながら立った。私は彼の襟首をつかみ、公園のトイレに連れ込んだ。

「な、なにするんですか」

男は怯えていた。だが同時に、何かを期待するような目つきだった。私は無言で男の股間を蹴りあげた。激痛に歪んだそいつの顔を驚掴みにして、壁に思い切り後頭部を叩きつけた。男は白眼を剥き、ずるずると倒れ、塗れた床に大の字になって失神した。

「本物の藤原紀香にタマを潰されたいって言ってたよね。その願いをかなえてあげる」

私は男の口のなかにハンカチを丸めて押し込んだ。それからズボンを脱がせた。陰囊がボールのように膨れ上がっていた。

陰囊にヒールの踵を乗せ、思い切り全体重をかけた。

陰囊が裂けた。その瞬間、男は大きく痙攣し、がっと血反吐をはき、ふたたびぐんにやりとになった。

裂け目から、血や液体とともに二つの真っ赤に腫れ上がった肉塊が流れ出した。これなのか。こんなかたちをしているものなのか。私は指で一つの睾丸をつまんだ。ぴくぴくと動くその肉塊をしばし見つめ、それからぎゅっと指に力をこめた。睾丸が裂け、どろどろしたものが吹き出した。もう一つも同じ目に合わせた。

私は男を放置したまま、急いでトイレを出た。

もし、その変態野郎が、藤原紀香に睾丸を潰されたと訴えれば、おそらくマスコミを騒がす大事件になったはずだった。だが、芸能ニュースには流れなかったし、かといって警察が私を疑うこともなかったようだ。ひよっとしたらあのまま死んでしまったのかもしれない。

だが困ったことが起きた。私の心のなかに、もう一度、男を去勢してやりたい、という欲望が芽生えたのだ。

男の睾丸を潰し、性器を使い物にならなくすることによって得られる性的な興奮。それはいい男とセックスをする以上の快感だった。

正直いって私は、よほど下手な男としか付き合っただろうか、いわゆるオルガズムという奴を味わったことがない。だが、あの男の睾丸を潰した後、私の性器はひどく濡れていた。マンションに帰ってからオナニーをした。何度も凄まじい絶頂が私を遅い、私は何度も一人で叫んでいた。

もう一度、あの快楽を味わいたい。

私は、かつての男友達を呼び出した。私と寝たあと、「紀香を抱けたみたいで満足した」と言った馬鹿だ。

夕方、男はにやにやしながら私のマンションにやってきた。

「まさか、君のほうから誘ってくれるなんて思ってもいなかったよ」

男は馴れ馴れしくソファに座った。

「あんときゃ、すげえ痛かったぜ。半月も痛みが止まらなくて、不能になったかと思ったよ」

私の性器が濡れた。そうか。そうだったのか。あれから全然話をしてないから知らなかったけど、それなりの効果はあったんだ。

「腹減ったな。何か食いにいくか？」

私がヨリを戻したがっていると勘違いしてる。あとで思い知れ。

私は微笑んでカマをかけた。

「ねえ、その前に質問なんだけど……私ってそんなに似てる？」

ああ、と言いかけて奴は慌てて口を噤んだ。その一言でタマをひねられたことを思い出したのだろう。

「その……うん、そりゃ似てるといえは似てるけどさ。君のほうが胸は大きそうだし」

なぜわかるのよ。よほど彼女のピンナップを見慣れてることか？

「誰だよ」

声が囁れていた。顔がマジになっていた。彼は狼狽した。

「誰って……？」

「だから、私は誰に似てるっていうのよ」

「もう、よそうよ」

彼は笑顔を作って立ち上がった。

「そんなことより気分直しにさ、おいしいもの食べようよ。ちよつといけるイタ飯屋見つけたんだ。好きだったろ？」

私も立ち上がった。必死で作ら笑いをする彼と対峙した。私も笑顔を作った。彼はほっとしたように表情を緩めた。

すかさず、彼の股間を思い切り膝で蹴り上げた。命中！



彼の体が一瞬宙に浮いた。

彼は悲鳴をあげてどさりと床にうずくまった。私は彼の顎を蹴りあげた。彼は蛙がひっくりかえったように仰向けに倒れた。私はすかさず、その股間を踵で踏みつけた。

彼は絶叫した。

「や、やめる……いい、痛い……」

私は容赦なく踵に体重をかけた。

「よ、よせ。潰れる……」

「白状しなよ」

私は冷たい声で言った。

「どうせ、私が彼女に似てるから接近したんだろ」

「……そ、そんなこと……」

彼は苦しげに身を振った。眼から涙が溢れ、下半身が痙攣していた。彼は両手で私の脚をつかもうとしたが、激しい痛みのためか、震えて思うように動けないようだった。

「どうせ私は代用品だったんだろ！」

「……ち……違う……」

「違わねーだろ！」

「……は、話を……きいて……」

「聞く耳もたねえよ」

「……ご、誤解……」

「どうせ彼女の写真見て、每晚オナニーしてたんだろ！」

「……あ、あ……っ、潰れる……」

「潰れちまえ！」

踵の下で睾丸がひとつ潰れた。彼は大きく体を反らせ、蛙のような声を出して失神した。

凄まじいエクスタシーが全身を貫く。眼を閉じ、両手で乳房をつかみ、天を仰いだ。この快感。

そのとき私は獣のような眼をしていたに違いない。私は、彼のズボンを脱がせ、ブリーフをずり下ろし、腫れ上がった陰囊を剥き出しにし、狼が獲物を食べるように、もう一個の睾丸をつまみ出し、ぎゅっと指でひねり潰した。

そのあと、断末魔の地獄を彷徨う彼の傍らで、オナニーした。

あと四人。

藤原紀香と似ているだけの理由で私を抱いた男は四人いる。そいつらみんな、玉を潰してやる。

一生、女を抱くどころかオナニーだって出来ないようにしてやる。それが私の復讐だ。

誰への……？ (1999・11・11)